

第2章第2節

2、天皇と怨霊

十数年前に「陰陽師」（おんみょうじ）という映画があった。これは滝田洋二郎監督、野村萬斎主演で製作された、夢枕獏原作の陰陽師・安倍晴明の活躍を描いた伝奇小説『陰陽師』の映画化作品であるが、平安時代における心の世界を良くとらえていると思う。

平安の時代、それは闇が闇として残り、人と鬼が共に生きていた時代。闇に潜（ひそ）みし鬼たちは人の心にまで息づいていた。鬼たちは時に歌に詠まれ、時に歯をむき、人に思いを揺さぶっていく。この時代、多くの神社仏閣が建立されたのも、それら鬼、怨霊、もののけの祟りから逃れるためであった。そして、それらの人々が信じた目に見えぬ妖（あや）しきものたちを世のことわりをもって制するものたちがいた。人の相を観（み）、星の相を観（み）て、天地あまねくに通ずるものたち。彼らこそ、人を平安の闇から陽へと導きし、陰陽師（おんみょうじ）と呼ばれたものたちであった。

北野天満宮の創建のきっかけとなった菅原道真の怨霊はあまりにも有名であるが、[光仁天皇](#)が苦悩した淳仁天皇の怨霊というのがある。しかし、それを説明する前に、「いかみの怨霊」について触れておかねばなるまい。私がかって作ったホームページをご覧ください。

最近では誠におぞましい事件があとを立たないが、それらおぞましい事件の中でも親が子供を殺す、子供が親を殺すという事件ほどおぞましい事件はない。母親の気持ちとしては、自分は殺されてもいい、子供だけは何とか助けて欲しい・・・というのが当たり前・・・。それが、事もあるように、自分も殺され、最愛の子供も殺される。しかも・・・自分が信頼していた夫に・・・である。怨めしい。夫が怨めしい。これが怨みをはらさいでか・・・。これが「いかみの怨霊」である。

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/i-onryou.html>

奈良時代から平安時代の初期は鬼とか妖怪とか怨霊だらけとっていい。鬼や妖怪や怨霊がうじゃうじゃ・・・。その中でも天皇の怨霊がいちばん恐ろしいものであったのはいうまでもないことである。その最たるものが「淳仁天皇の怨霊」である。「いかみの怨

霊」に悩まされる光仁天皇の心中は、淳仁天皇の怨霊と「いかみの怨霊」がともに自分に祟るのではないかと非常な不安に陥っていたと思われる。その「淳仁天皇の怨霊」については、私のホームページがあるので、是非、次をご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/jyuonryou.pdf>

さて、平安時代と言え、どうしても「早良親王の怨霊」について話さなければならない。

平安遷都は桓武天皇によってなされた。その弟が早良親王である。英明の誉れ高く11歳で出家、大安寺の僧となったが、還俗し、桓武天皇が即位するや皇太子となった。

桓武天皇は、御承知のように、社会、政治、宗教など諸般の改革を求め、都を奈良から長岡に移すことにした。

これは我が国における今の事情と良く似ているかもしれない。けだし、何ごとも古くなるとそれなりに垢がたまって、もはや新しい時代の流れについていけなくなるようだ。革袋をかえないと中身は変わらないのかもしれない。

その長岡遷都の責任者である桓武天皇の寵臣・藤原種継（たねつぐ）が殺された。犯人として、大伴継人（つぐひと）と大伴竹良（たけら）が捕まったが、その背後に早良親王がいるとして、早良親王は罪を厳しく責められた。濡れ衣を着せられたとの説もあるがすべて闇の中だ。ともかく、早良親王は、乙訓寺に幽閉された後、淡路に流罪となり、その船の中で憤死する。

以後、早良親王の霊は様々な祟りをする。すなわち、皇太子安殿親王（あてのしんのう）の長患いが打ち続くし、暴風雨、地震、早魃（かんばつ）、虫害、寒冷による凶作、そこから生じる悪疫の流行・・・・、それらすべての原因は、早良親王の怨霊の祟りであると考えられた。当時の陰陽師（おんみょうじ）が占ト（せんぼく）によって断定したのである。

桓武天皇は遂に延暦13年（794）、造営中であった長岡京の地を捨てて都を京都に移した。京都は、陰陽師（おんみょうじ）に言わせれば、風水にかなったいわゆる四神相応の（しじんそうおう）の地であり、桓武天皇はそこへ逃げ籠ったのである。そこでまず

必要とされるのは早良親王の鎮魂であった。鎮魂のための諡（おくりな）・崇導天皇が与えられ、[崇導神社](#)が建てられた。



[その崇導神社](#)において毎年5月5日に行われる大祭、これが珍しい祭りで、[「早良親王の怨霊が行く」](#)のである。

今私は「天皇と怨霊」というテーマでこれを書いている。朝廷なり天皇が怨霊によってその存続が危なくなるという問題を取り上げている。これは政治問題といえ政治問題である。朝廷なり天皇の存続がいちばん危なくなったのは、菅原道真の怨霊によってである。

「北の天神縁起」などによると、菅原道真が死んで幾月も経たないある夏の夜、道真の霊魂が比叡山の僧坊に現れて、尊意（そんい。道真が仏教を学んだ師）に向かって、これから都に出没し怨みを復讐ではらす決意を述べ、邪魔をしないようお願いをしたのだそうだ。その後、道真の怨霊は暴れまくることになる。

その後数年経った908年10月、道真配流の首謀者のひとり[藤原菅根（すがね）](#)が54才でなくなったが、都では道真の怨霊の祟りだという噂が流れた。そして、翌年、道真の怨霊はいよいよ核心に迫っていく。

以上の出来事は『北野天神縁起』などで浄蔵と道真の霊が対峙する場面として著されているが、決して浄蔵と道真の怨霊との対決というようなものではなく、無実の罪で流罪となった道真の正当性を語るために、若くして当代一の霊力を持った浄蔵が引き合いに出されているのである。どれほど浄蔵が有名だったかがわかるであろう。

そこでまず「浄蔵」について、私のホームページを紹介することとしたい。じっくり読んでいただき、浄蔵という人がどういう人であったのをまずご理解いただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/jyouzou.pdf>

今私は「天皇と怨霊」というテーマで律令制度の危機を語ろうとしているのだが、その場合、まず菅原道真の怨霊がどのように鎮められたのか、またどうして歴史上もっとも平和な平安時代という時代が作られていったのかを考えねばならない。その鍵を握るのは「天神信仰」である。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tenjinsin.pdf>

歴史上天皇を中心とする朝廷、つまり律令制度というものがいちばん危なくなったのは「平将門の乱」のときである。この危機を乗り切るためには、朝廷はなりふり構わぬ対策を講ずるが、最大の功労者は「浄蔵」である。このことについては、私のホームページを是非ご覧戴きたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/masakado.pdf>